緋弾のアリア～神殺し伝説～

珍獣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾のアリア～神殺し伝説～

【Ｎコード】
Ｎ１４３０Ｙ

【作者名】
珍獣

【あらすじ】
世界でもトップクラスの特殊部隊、米軍・第１特殊部隊デルタ作戦分遣隊、通称デルタフォースに１４歳で入隊した米軍少佐の毒島（ぶすじま）金助（きんすけ）。
そんな金助は、更に諜報を得意とするＳランクの凄腕武偵でもあった。
軍の上司でもある父に勧められて４月から従兄の住む日本の武偵高に転校することになった金助。
だが、日本で出会った仮面を付けた謎の男に渡された刀『神殺し』

を手にしたことで、色金を巡る争いに巻き込まれていく・・・！！

プロローグ～再会～（前書き）

先に言っておきますが、私には文才というものはありません！！↑ひどいことになってるかもしれませんが、温かい目でで読んでいただけたら幸いです。

プロローグ～再会～

武偵。それは日々凶悪化する犯罪に対抗するために作られた国家資格で、武装探偵の略称である。
武偵は武装を許可されて、武偵法の許す範囲内においてありとあらゆる仕事を請け負う、いわゆる便利屋
である。

レインボーブリッジ南方に浮かぶ南北およそ2キロメートル・東西500メートルの人工浮島、通称学園島。
元は空港滑走路として使われる予定だったこの島に、武偵の教育機関である東京武偵高は存在する。
その武偵高の施設の周りを俺は歩いていた。
若干短めの黒髪に、それなりに整った顔立ち、185センチの長身、武偵高の制服を着ている。
俺ー毒島（ぶすじま）　金助（きんすけ）は、教務科（マスターズ）で転校の最終手続きを終え、敷地内を散歩していた。
自慢だが、俺は米陸軍特殊部隊のデルタフォースの最年少隊員であり、階級は少佐だ。
なぜそんな俺が東京武偵高にいるのかというと、父親であり、尚且つデルタフォースの司令官である毒島（ぶすじま）　金正（かねただ）に「日本の優秀な武偵の中で、自分を磨くように」という指示を受けたのと、従兄がこの学校にいるからだ。

俺は周りの施設を見回した。
『アメリカの基地程では無いが、なかなかの施設が揃ってるな。』
俺は更に歩を進め、気がつけば第2グラウンドの横に来ていた。
『ここがグラウンドか。広さはまあまあかな？』

そう言いながら歩きながらグラウンドの広さを確認していると、グラウンドの入口からかなりのスピードで何かが入っていくのが見えた。
『自転車・・・なんであんなに速度だしてるんだ？駐輪場はあっちじゃなかったはずだし・・・』
自転車の行き先を考えていると、後ろから少女がパラグライダーで低空飛行しながら追いかけて行った。
『・・・新手の鬼ごっこかな？』
そう呑気な事を考えていたらパラグライダーの少女が自転車の先に回り込み、掴まるところに足を引っ掛けて逆さづりになり、自転車に乗った奴にぶつかって自転車に乗っていた奴はパラグライダーの少女に抱きつく形で自転車から持ち上げられた。
その直後、乗り主をなくした自転車は徐々に速度を落としてーー爆発した。
パラグライダーと自転車の二人は、今のの爆風で体育倉庫の中に転がって行った。
『マジかよ・・・！！』
訓練で何度も使用したから分かるが、爆発の音・威力・爆発の仕方等の情報から察するに今の爆発はＣ４爆弾が使われていたということが俺には分かった。
しかも、自動車くらいなら余裕で吹き飛ばせるほどの量を。
『とにかく体育倉庫に向うか』
ひとっ飛びでフェンスを乗り越えて、体育倉庫に向かって走り出した。
だが、それは背後からの銃撃に止められた。
弾が跳んできた方を見ると、そこにはスピーカーとイスラエルのＩＭＩ社の傑作銃のＵＺＩが取り付けられた、セグウェイが１０台止まっていた。
『なんでセグウェイなんかにＵＺＩが付いてるんだよ！！』
俺は近くの太い木の陰に隠れた。

セグウェイは、３台だけ残して残りの7台は体育倉庫の方に向かって行った。
『一体どうなってやがるんだよ・・・・！！』
キレ気味の声でそう言いながら、右脇のショルダーホルスターからベレッタを抜いた。
セグウェイとの距離は、およそ８ｍ。
『喰らえ！』
少しだけ木陰から身を出して、セグウェイに向かって残弾が無くなるまで発砲した。
あまり良い射撃体勢ではなかったが、綺麗に全弾命中し、２台は壊れていた。
『一つ残ったか・・・』
ベレッタのマガジンを代えて、俺はまた木から身を出して最後のセグウェイに数発発砲した。
撃った弾の内一発がＵＺＩに当たり、セグウェイは行動不能になった。
『無駄に手間掛けさせやがって・・・』
セグウェイの破壊を確認し、直ぐに体育倉庫に向かった。
ちょうどその時、体育倉庫の方から少年が一人出てきた。
『なっ・・・・・！！』
その少年の顔を見て、俺は目を丸くしたまま固まった。
その少年のことを、俺は知っていた。
『キンジ・・・・・』
その少年ーー遠山　キンジ（とおやま　きんじ）は、俺の従兄だからだ

プロローグ～再会～（後書き）

中途半端な終わり方をしてしまいましたｗｗ
とりあえず次はもう少ししっかりと書きたいと思います。

第1話～遠山キンジと神埼・H・アリア～（前書き）

1日1話ペースで書こうと思ってましたが、予想以上にキツイです

第1話～遠山キンジと神埼・H・アリア～

それなりに離れていたので、キンジは俺に気づくこともなく去っていった。
『って事は自転車に乗ってたのはキンジだったのか・・・。
だが何故パラグライダーの子に追われてたんだ？』
追いかけようか考えたが、そこであることを思い出した
『そうだ！さっきのセグウェイ！！』
俺は今さっきキンジが出てきた体育倉庫へと走った。

この時に体育倉庫に行ってしまったことを、後に後悔することになるとは知らずに。

体育倉庫のすぐ近くまで来た俺は、言葉を失った。
体育倉庫の前には、セグウェイに取り付けられていたＵＺＩが大破ー恐らく銃口に弾丸を入れて壊したーしていた。
『これは・・・キンジがやったのか・・・？それとも・・・・あいつか？』
「アイツ！今度会ったら絶対風穴開けてやる・・・！！」
俺の目線の先には、小太刀を振り回しながらワ―キャー叫んでいる少女がいた。
小学生くらいの身長に、武偵高のセーラー服を着ている。
特徴的なのは、膝のあたりまである長いピンクのツインテールだ。
しかし・・・・。
『何というアニメ声！・・・・・って今はそんなこと言ってる場合じゃねぇな。
エクスキュー・・・じゃなくてすいません』
英語を話しそうになりながらも、転校初日から悪い印象を持たれまいと丁寧な少女に声をかけた。

「ひゃうっ！！」
いきなり話しかけられてびっくりしたのか、少女はバッと振り返って俺を見た。
『驚かせちゃった？それはスイマセン。ところでいきなりだけど「見ぃつけた！！」・・・へ？』
話している途中でいきなり指を指されて、俺は間の抜けた声を出した。
「さっきはよくもやってくれたわねこの強猥男！！」
少女は独特な地団駄を踏みながら怒鳴りつけてくる。
『強猥？何のことですか？』
「とぼけてるんじゃないわよ！！」
少女はそう言うと、物凄いスピードで小太刀で斬りかかってきた。
『ぬぉっ！！』
全力で横に跳んで、ギリギリで小太刀をかわす。
「ええいちょこまかと！！」
少女は直ぐに方向転換して、再度俺に斬りかかってきた。
流石に連続でよけるのは無理だと判断し、ショルダーホルスターに銃と一緒に付けてあるコンバットナイフを2本取り出し、切り結ぶ。
勢いは少女の方が上だが、頭に血が上っていて力にムラがあったため腕力だけで押し切ることができた。
もはやこの様子では事情を聞くのは不可能に等しい。
俺はこっそり隠し持っていたスタングレネードーーちなみにこれは閃光だけのタイプだーーを後ろ手で準備する。
『てことで三十六計逃げるに如かず！！』
少女と俺との間にスタングレネードを投げて、全速力で後ろを向いて走り出した。
少女は、投げられたものがスタングレネードだと直ぐに理解し、腕で目を隠していた。
スタングレネードが爆発し、辺りは一瞬光に包まれた。
俺は少女が動き出す前になんとかその場を離脱し、俺は教務科（マスターズ）に向

かった。

『まさかいきなり襲われるとはな・・・しかも強猥男とか言われたし・・・』

俺は教務科で先生に指示された教室（ちなみに２－Ａである）の前で、中で軽く挨拶をしている担任の高天原ゆとり先生を待っていた。

『わざわざ外で一旦待たせてから呼ばなくても、最初っから中に入れてくれればいいのにな』

そんな感じで愚痴ってると、教室の中からこんな声が聞こえてきた。

「私からの挨拶が終わったところで、スペシャルゲストの転入生を紹介しまーす♪

ニューヨーク武偵高から来た、カッコイイ帰国子女ですよー♪」

先生、なんで紹介する前からそんなにハードルあげるんですか・・・

そんな俺の心の声もつゆ知らず、先生が「それでは入ってきてくださーい」と呼んできた。

まあそれはそれとして置いといて、やはり第一印象は大事だ。

キツイ顔になっていないか確認し、俺は教室の扉を開いて中に入った。

瞬間、教室中の女子生徒は「キャー！！」という悲鳴なのか何なのかよく分からない声を上げた。

良く知り合いに「顔立ちがいい」とか「イケメン」とか言われるが、こんな悲鳴を上げられるほどのものだったとは思わなかったな。

教壇のところまで行き、先生に軽く頭を下げてからチョークを手に取り、黒板に漢字で名前を書いてーーちなみに字はかなり綺麗ーー皆の方に向き直った。

クラスの皆をざっと見渡すと、そこにはキンジの姿があった。

『先生の紹介にあったとおり、ニューヨーク武偵高から来た毒島金助です。よろしくおねがいします』

丁寧に自己紹介をし、最後に軽い営業スマイル（？）をした。
するとまた女子生徒達が「キャー！！」と声を上げた。
若干引き気味の先生に促されて、キンジの真後ろの空席に座った。
「凄い人気だな、お前。俺は遠山キンジだ。」
座るなり、後ろを向いてキンジが話しかけてきた。
どうやら俺のことを忘れたらしい。
俺は、キンジの顔を笑顔でジーっと見つめる。
「どうした？顔になんか付いてたか？」
キンジは両手で顔を探った。
もちろん何も付いていない。
『何だ、忘れられちまってたか』
「忘れる？何のことだ？」
『本当に覚えてないのか・・・まあしょうがないか。最後に会ったのだって5歳くらいだったもんな・・・』
「お前は何を言ってるんだ？」
少し感傷にひたっていた俺に、キンジはさっきとほとんど意味が変わらない質問を投げつけてきた。
『俺だよ俺。従兄の金助だよ』
「・・・・・！！」
キンジは口をあんぐり開いたまま固まった。
『思い出してくれたか？キンジ』
「・・・そうか、金助だったのか」
『積もる話もあるだろうが、それは後でな？』
俺は目でキンジに前を向くよう促した。
キンジは何か言いたそうな顔をしていたが、渋々前に向き直った。
キンジが前を向くとほぼ同時、教室前方の席の女子生徒が、立ち上がった。
自己紹介でもやらせるのかなーと俺は呑気な事を考えていたが、よく見ると立ち上がった女子生徒はさっき一戦交えたあの少女だった。
「死角で見えんかった・・・」

目の前ではキンジが机に突っ伏してた。
体育倉庫で二人に何かあったということは、キンジのリアクションを見れば一目瞭然だった。
朝はいきなり襲われて名札ーー武偵高では、４月に全員が名札を付けるルールがあるーーを確認し損ねたが、今は見える。
『・・・神埼・Ｈ・アリア？』
女子生徒の胸に付いた名札の名前を読み上げる。
その時、神埼は教壇の横からキンジを指さしてこう言った。
「先生、あたしはアイツの隣に座りたい」
俺以外のクラスの生徒、絶句。
そして数秒沈黙が続いた後に、クラス中に歓声が起こった。
キンジを見ると、椅子からずり落ちていた。
「よ・・・・良かったなキンジ！なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ！
先生！オレ、神崎さんと席変わりますよ！」
するとキンジの真右に座っていたツンツン頭の男子生徒が立ち上がるなりキンジの手を振りながら満面の笑みでそう言った。
てかでかいなコイツ。１８５センチある俺よりもでかいぞ。
「あらあら、最近の女子高生は積極的ねぇー。じゃあ武藤君、席を代わってあげて。」
先生がうれしそうにキンジと神崎を交互に見ながら言った
一旦ここまでの流れを整理しよう。
・朝、二人は爆弾事件に巻き込まれて、体育倉庫で何らかの接触をし、恐らくキンジが何か神崎を怒らせるようなことをした。
・俺のクラスは、キンジと神埼が一緒だった。
・神崎が突然キンジの隣に座りたいと言い、武藤というキンジの友人らしき生徒が何やら勘違いをして、うれしそうにキンジの隣の席を譲った。
駄目だ、全く状況が掴めない・・・
ふと周りを見ると、金髪の神埼と同レベルの小ささの理子という女

子生徒が「フラグがバッキバキ」だの「熱い恋愛の真っ最中」とかよくわかんないことを言いながら机に突っ伏して落胆しているキンジの机のまわりをよく分からないステップを踏みながら回っていた。周りの生徒は、なんだかキンジにあらゆる罵声を浴びせていた。

ズガガン！！

そんな若干シュールな光景を眺めていると、突然二連発の銃声が鳴り響いた。
よくわかんないけど、今のやり取りで何故か顔を真っ赤にした神崎が2丁の大型拳銃のガバメント（M1911）をぶっ放したらしい。
「れ、恋愛なんて・・・・くっだらない！」

チン、チンチンチチン・・・・・

銃から排出された2つの薬きょうが落ちる音が響いた。
良く分からない舞を踊っていた理子は、ロボットのようなカチカチした動きで自分の席に早急に戻った。
いくら校内での発砲が許可されているとはいえ、このタイミングでいきなり銃をぶっ放されたら俺のような軍人ほど発砲に慣れていなければ、そりゃあビビるだろう。
「全員覚えておきなさい！そういうバカなことを言うヤツには・・・」
これが、神埼・H・アリアの皆に向けた唯一の自己紹介だった。
「風穴あけるわよ！！」
2ーAの教室に、天井に向けて放たれた、乾いた銃声が響いた。

第1話～遠山キンジと神埼・H・アリア～（後書き）

擬音が何気に難しいです

第2話～ランク決めと奴隷宣言～（前書き）

激しい腹痛の中書いたため、文章が変かもしれません

第2話～ランク決めと奴隷宣言～

昼休みになるやいなや俺は質問攻めにあっていた。
クラスの連中どころか、噂を聞きつけた他のクラスから来た奴らも交じって、教室は飽和状態だ。
そんな状況だが、悪い印象を持たれないためにもきちんと質問ーー一度だけ何故かスリーサイズを聞かれたーーに答えなければいけなく、神崎関連で俺のように質問攻めにあいそうになって逃げた従兄をこの時は恨めしく思った。
「前の学校では専門科は何だったの？あとここではどこに入る予定なの？」
ふと、そんな質問をされた。
やっとまともな質問が出てきたな・・・
『ニューヨーク武偵高では諜報科（レザド）で、Sランクだったよ。ここでは強襲科（アサルト）に入るつもりなんだ』
そう回答したところSランクのところで歓声が上がり、強襲科以外の生徒からは
「強襲科なんて物騒なところ止めて探偵科（インケスタ）においでよ！！」
「Sランクなのに科を変えるなんてもったいないよ！諜報科にしなよ！」
「いや、車輌（ロジ）科にすれよ！」
「衛生科（メディカ）にするべきよ！」
「情報科（インフォルマ）だ！」
といった感じの意見ーー願望が出てきた。
ここは理由を話すしかないな。
『あ～、悪いけど強襲科になるのは決定事項なんだ。俺は武偵であると同時に、米陸軍の特殊部隊デルタフォースに所属していて、そ

この司令官でもある父の命令で強襲技術を磨かないといけないんだ。
』
俺は強襲科を選ぶ理由をきちんと説明し、その場の争いを収めた。
「「「「「・・・・え？」」」」」
周りの皆が唖然としている中、一人の男子生徒がこう聞いてきた。
「デルタフォースって、あのデルタフォース！？確かデルタフォースの入隊できる最低の階級が２等軍曹だったよね？・・・失礼かもしれないけど、毒島君の階級は？」
詳しいものだ、と感心しながら俺は質問にこう答えた。
『少佐だよ』
２ーＡ教室に、荒っぽい武偵高ではかなり珍しい長時間の沈黙が流れた。

放課後、俺は強襲科を担当している蘭豹（らんびょう）に呼び出され、廃ビルの前に来ていた。
なんでもランクを決める為にテストをするらしい。
アメリカから来たばっかりでしっかりした武装をそろえられていないので、テンションはかなり低い。
今持ってきているベレッタＭ９２Ｆだって、軍から支給されたもので元は俺の銃ではない。
それにナイフも急いで購入した安物だ。
唯一の救いは自作して作ったスタングレネードだな。あくまでも自作の域を超えないけど。
自分の装備に肩を落としていると、後ろから声がかけられた。
『蘭豹先生。』
「来たか毒島。キチンと武装してきたな？」
振り返ると、立っていたのは蘭豹だった。
男物っぽいＴシャツとカットジーンズを着ており、背中には２ｍはあるであろう長刀を背負っていて、何より腰まであるでかくて長いポニーテールが特徴的だ。

かなりの美人なのだが、凶暴な性格にバカみたいな怪力の持ち主の為雌ゴリラと呼ばれているーーキンジ情報ーーらしい。
『はい先生。』
無論、嘘だ。
「よし、それじゃテストの詳細を説明するで。お前にゃは武装した強襲科のガキ共と一緒にこの廃ビルに入って、他の奴を相手に捕縛しあってもらう。以上や。何か質問はあるか？」
ずいぶん短い説明だなと思いつつ、ありませんと返事をする。
「じゃあ中に入れ。サイレンが鳴ったらスタートや。」
そう言って、蘭豹はビルの横にある小さな建物に入って行った。
『さーて、がんばりますか。』
俺は廃ビルの戸に手をかけ、開けた。
中はそれなりに広く、遮蔽物は正方形の柱がいくつかあるだけだった。
周りの状況を確認していると、サイレンが鳴った。
俺は、1階に誰もいないことを確認してから2階へ続く階段を登った。
普通の人は、隠れながら慎重に進むだろう。
だが、俺は違う。
諜報専門の兵士になるために物心がつく前から父にハードな訓練をやらされていて、そのおかげで俺は人の気配を察知する能力が異常に高いのだ。
よって、俺に対して学生の武偵レベルの待ち伏せは意味を成さのである。
階段を登っている途中で、2階に何人かの隠れている気配を感じた。
どうやら他の生徒達は、手を組んで一気に多人数で攻めて終わらせる作戦らしいな。
『だが甘い。』
俺は脇のホルスターからベレッタを抜いて階段を駆け上がり、直ぐ近くの柱の陰からナイフを持って飛び出してきた男子生徒の足に弾

を当てて体制を崩し、一気に距離を詰めて首の後ろに手刀を喰らわせて気絶させた。
次に俺はナイフを左手で取り出して、右の瓦礫から出てきたナイフを持った男子生徒と拳銃を構えた女子生徒に向かって構える。
銃の射線から逃れるために、突っ込んでくる男子生徒の陰に隠れた。
斬りかかろうとナイフを少し振りかぶった男子生徒にかなり至近距離まで肉薄してナイフを封じ、右肘を鳩尾に入れる。
そして気絶した男子生徒を盾にして、発砲しかねている女子生徒の脇腹に発砲して狙いを外させてから接近し、ナイフを突き付けて反抗できなくさせた。
『チョロイな♪』
俺は生徒達を縄で柱に巻きつけ、3階に向かった。

3階を制圧した俺は、結構時間はかかったがその勢いのまま全ての階の生徒を倒し、捕縛した。
残りが居ないのを確認して、ビルを出た。
余談だが、3人ほど抜き打ちで教官が居たのだが、勝てないと判断してウマ〜くやり過ごして放置した。
ビルを出ると、蘭豹が俺を待っていた。
「なかなかやるやないかい。時間がかかったとはいえ、まさか全員を捕えるとわ思わなかったで。」
『お褒めの言葉、ありがとうございます。』
蘭豹の褒め言葉に、軽く礼をしながら答える。
「ところで偶然遭遇しなかったのかは知らんが、中に教官3人を抜き打ちで隠れさせていたんだが気づいとったか？」
『いえ、それは気づきませんでした。』
気づいてたのに無視して戻って来たと知られたら何を言われるか分からなかったので、嘘の返答をする。
「そうか。まあそんなことはええわ。とりあえず結果を言うで。毒島、お前はAランクや。」

Aランクか、まあ<あのモード>を使わなかったのだから妥当な結果だろう。
結果にある程度満足した俺は、蘭豹に一礼してその場を去った。

俺は第三男子寮のキンジの部屋の前に立っていた。
高天原先生にこの部屋を使うように指示をされたからである。
『教務科には従兄だってこと教えてないのにな。』
とりあえず中に入るためにインターホンを押した。
中からドタドタと足音が聞こえて、直ぐにドアは開かれた。
「どちら様・・・って金助？どうしてここに？」
中からドアの隙間からキンジが顔を出した（当たり前だ）。
『他に空き部屋が無いらしくてね、ここを使えって先生が。入って良いか？』
事情を説明し、俺は部屋の中に入った。
すると、中には何故か朝襲ってきた神崎・H・アリアがいた。
『ゲ、神崎・・・！』
朝のことを思い出し、露骨に嫌な声を出してしまった。
「アリアで良いわよ。それとゲ、ってなによ。あたしが何かしたかしら？」
コイツ、どうやら朝の出来事を忘れてやがるな。
若干イラッとした俺は朝襲われたことを、嫌みったらしく説明してやった。

『・・・てことでお前はキンジと俺を間違えて襲ったってこと？』
アリアが言うには、興奮していたアリアは、一旦どこかへ行ったキンジが戻って来たと勘違いして襲ってしまったらしい。
ていうかキンジはアリアに何をしたんだろう・・・。
キンジの方を見ると、少し顔をうつむかせた。
そうか、あのモードか・・・
「そうよ。悪かったわね。・・・てことはあの時に逃げたのはキン

ジだけじゃなくてコイツも・・・・キンジだけのつもりだったけど、決めたわ。」
アリアは少しためてから、こう言った。
「キンジ、金助。アンタ達、あたしのドレイになりなさい！」
俺とキンジの中から魂が抜けていくのが分かった。

第2話～ランク決めと奴隷宣言～（後書き）

蘭豹の関西弁が微妙でまとまらないですｗｗ

第3話～仮面の男と神殺し～（前書き）

今回は長めです。

第3話～仮面の男と神殺し～

まさかの奴隷になれ宣言のあと、何故かある女物のトランクを部屋の隅にどけて、アリアの要望ーー実際は命令に近いーーで3人でインスタントコーヒーを飲んでいた。
このコーヒーなかなかいけるな。とか考えている俺の横で、アリアは出されたインスタントコーヒーを不思議そうな目で見ている。

「これホントにコーヒー？」
どうやらアリアはインスタントコーヒーを知らないらしい。
「それしかないんだから有り難く飲めよ」
とキンジ。
「・・・ヘンな味。ギリシャコーヒーにちょっと似てる・・・・・んーでも違う」
毒味をするようにインスタントコーヒーを飲んでアリアはそう言った。
なんて贅沢な奴だ。一回アリアには我がデルタフォース名物のコーヒーーー別名：黒い水ーーを飲ませなければいけないようだな。
あれほど不味いコーヒーは世界中探してもなかなか無いだろうからな。
「味なんかどうでもいいだろ。それよりだ」
キンジは一度区切ってコーヒーをすすり、テーブルの椅子に腰をかけて続ける。
「今朝助けてくれたことには感謝してる。それにその・・・・お前を怒らすような事を言ってしまったことは謝る。
でも、だからってなんでここに押し掛けてくる」
そう口をへの字に曲げながらキンジが言うと、アリアはカップを持ったまま、きろ、と紅い目だけを動かしてキンジを見て、口を開く。
「分かんないの？」

「分かるかよ」
「あんたならとっくに分かってると思ったのに。んー・・・・でも、そのうち思い当たるでしょ。まあいいわ」
いや曖昧過ぎだろアリアさん。
ズズズ・・・コーヒーウマウマ。
「ねぇ、おなかすいた」
アリアは話題を変えつつ、ソファの手すりに身体をしなだれかけさせた。
コイツっていきなり女っぽい仕草をするんだな。
キンジは顔逸らしてるし。
ていうか俺も腹が減ってきたな。
「なんか食べ物ないの？」
「ねーよ」
『え？無いの？』
「ないわけないでしょ。あんた普段なに食べてんのよ」
「食いものはいつも下のコンビニで買ってる」
「こんびに？　ああ、あの小さなスーパーのことね。じゃあ行きましょう」
「じゃあって何でじゃあなんだよ」
「バカね。食べ物を買いに行くのよ。もう夕食の時間でしょ？」
おお、これがズレ漫才というやつか。言葉のキャッチボールが成立していないぞ。
ていうかアリア、ここで夕食食ってくつもりなのかよ。
キンジが頭痛っぽいなにかで頭を押さえていると、アリアはバネでも付いてるかのように、ぴょーん！とソファからジャンプして立ち上がり、キンジにとことこと近づいて上目使いでキンジを見上げる。
うわ、やっぱりちっさいなー。
「ねえ、そこって松本屋の『ももまん』って売ってる？　あたし、食べたいな」
ということで3人でコンビニに行くことになった。

ももまんとは、一昔前にちょっと流行った桃の形をしただけのごく普通のあんまんらしい。
それをアリアはなんと7個も買ったのだ。
全部食べるわけないよな、と思っていたが、もうすでに5個平らげている。
ちなみにキンジはハンバーグ弁当、俺は材料を買ってきて台所で炒飯を作っている。
やっぱり料理が出来るってのは良いよな。
皿に乗せてリビングに行くと、キンジはさっきの奴隷宣言の意図を確かめていた。
「ドレイってどういう意味だ？」
「強襲科であたしのパーティーに入りなさい。そこで一緒に武偵活動をするの。もちろん金助もね」
アリアはももまんをほおばりながらモゴモゴと説明をする。
てかドレイってそういう事かよ。
『強制ですか・・・・』
「何言ってんだ。俺は強襲科がイヤで、武偵高で一番マトモな探偵科に転科したんだぞ。
それにこの学校からも、一般の高校に転校しようと思ってる。武偵自体、やめるつもりなんだよ。
それを、よりによってあんなトチ狂った所に戻るなんてーーームリだ」
俺はキンジの横に座りながら話を聞く。
ていうかキンジが転校するつもりだっていうのは知らなかった。
昔は金一さんみたいに立派な武偵になるってはりきってたのにな・・・。
まあその目標だった金一さんが亡くなったんだから、分からない話でもない。

初代・かの有名な名奉行、遠山の金さんから続く遠山家の人間は先祖代々正義の味方をしていた。
時代によりその職業は違ったが、遠山家の人間はヒステリア・サヴァン・シンドローム（ＨＳＳ）ーー俺とキンジはヒステリアモードと呼んでいるーーという神経性の特殊な遺伝能力を持っていて、恋愛時脳内物質が一定以上分泌されるとそれが常人の３０倍もの量の神経伝達物質っを媒介して、大脳・小脳・脊髄などの中枢神経の活動を劇的に亢進させ、論理的思考力・判断力・更には反射神経もが飛躍的に上昇し、一時的に人が変わったようなスーパーモードになれたーー当然キンジや俺にも遺伝しているーーのだ。
ちなみに恋愛時脳内物質の分泌を、一言で言えば「性的に興奮すること」であるーー俺は例外だがーー。
キンジの兄の遠山金一はヒステリアモードを完全に操る非常に優れた武偵でとにかく強く、正しく、そして誰よりもやさしい人だった。味方が敵に囲まれて他の仲間から見捨てられた時も、金一さんは見捨てずに無傷で助け出したという話もあるほどだ。
だが、金一さんは去年のクリスマスに浦賀沖で海難事故に遭い、乗客を全員避難させたがそのせいで逃げ遅れた金一さんは帰らぬ人となった。
捜索しても死体は見つからず、それどころか乗客たちからの訴訟を恐れたクルージングイベント会社、そしてそれに焚きつけられた一部の乗客たちは、事故の後金一さんを激しく避難した。
曰く、「船に乗り合わせていながら事故を未然に防げなかった無能な武偵」――と。
ネットや週刊誌、それにテレビなどのあらゆるメディアで避難され、遺族であるキンジに罵詈雑言を吐き、更に謝罪しろとまで言ったのだ。
俺は情報操作でキンジとの繋がりを隠ぺいしていたので何もなかったが、そのニュースを見ているだけで胸が痛んだ。
金一さんは人を助けて犠牲になり、スケープゴートにさせられた。

キンジは、この事件の原因を「武偵なんかをやっていたから」とし、金一さんが武偵になる要因ーー兄を破滅への道へ追いやることとなったヒステリアモードになることを嫌になった、と聞いた。
キンジが武偵をやめると言っても無理はない。
だがそれに対しアリアは、
「あたしがキライな言葉が3つあるわ」
と聞いていない。
何だよ感傷にひたってた俺がバカみたいじゃねぇか。
キンジも同じ考えらしく、
「聞けよ人の話を」
と反論する。
「『ムリ』『疲れた』『面倒くさい』。この3つは、人間の持つ無限の可能性を自ら押しとどめる良くない言葉。あたしの前では二度と言わないこと。いいわね？」
そう言ってアリアは7つ目のももまんを平らげた。
「キンジのポジションは———そうね、あたしと一緒にフロントがいいわ。金助はまだ実力が良く分かってないから保留ね」
『保留って扱い酷くない？』
ちなみにフロントとは、フロントマン、武偵がパーティーを組んで布陣する際の前衛の事である。
最前線で戦うため、負傷率ダントツの危険なポジションである。
「よくない。そもそもなんで俺なんだ？」
とキンジが理由を聞こうとすると。
「太陽は何で登る？月はなぜ輝く？」
『いや話跳び過ぎだろ・・・』
そんな俺の言葉もむなしくアリアは続ける。
「キンジは質問ばっかりで子供みたい。仮にも武偵なら、自分で情報を集めて推理しなさいよね」
イヤお前にだけは言われたくねぇよ。
と言いそうになったが、逆鱗に触れそうだったのでこらえる。

『（キンジ！）』
俺は小声でキンジに話しかける。
「（ああ、分かってる。こいつとは、会話のキャッチボールが成り立たない。対抗するにはこちらも自分の要求を単刀直入にたたきつけるしかない。そうだろ？）」
『（その通りだ。てことで行け）』
アリアの死角でキンジに親指を立てた右手を出す。
キンジはそれにうなずいたあと、アリアに向かって斬りこんだ。
「とにかく帰ってくれ。俺は金助と話したいことがあるんだ。帰れよ」
これはなかなか良かったんじゃないだろうか。と思ってた矢先、アリアはこう答えた。
「まあ、そのうちね」
俺は椅子からズルッと滑り落ちた。
「そのうちっていつだよ」
「あんた達が強襲科であたしのパーティーに入るって言うまで」
『（頑固だな・・！）だがもう夜だぞ？』
「なにがなんでも入ってもらうわ。私には時間が無いの。うんと言わないなら・・・」
アリアはそこで言葉を止める。
「いわねーよ。なら？　どうするつもりだ？やってみろ」
キンジが毅然とした態度で断ると、アリアはその大きな眼でキンジをにらみ、こう言った。
「言わないなら、泊ってくから」
『「・・・はぁ！？」』
俺とキンジの顔が、痙攣を起したように引きつる。
「ちょ・・・ちょっと待て！何言ってんだ！絶対ダメだ！帰れ！」
キンジが慌てて止めに入る。
当然だろうな、ヒステリアモードになる要因を泊めるなんてことキンジが許すはずがない。

「うるさい！泊ってくったら泊ってく！！長期戦になる事態も想定済みよ！」
と言ってアリアは部屋の隅に置いてあるトランクを指さした。
『「あれ宿泊セットかよ！！」』
キンジとシンクロツッコミをしたところで、アリアが突然態度を変えた。
「――――出てけ！！」
『いや何で！？それはこっちのセリフだぞ！？』
「な、何で俺らが出ていかなきゃいけないんだよ！ここはお前の部屋か！」
「分からず屋にはおしおきよ！外で頭冷やしてきなさい！しばらく戻ってくるな！」
子供みたいに両こぶしを振り上げ、アリアは俺たちにネコのような犬歯を剥くのだった。

『追い出されちまったな・・・』
「そうだな・・・しかも中から鍵かけられてるし・・・」
俺とキンジは、部屋の前で肩を落としていた。
『せっかくゆっくり話でもしようとしてたのにな。・・・まあまた今度の機会にするか』
「だな。　で、この後どうする？俺はコンビニで時間つぶすけど」
『ん～・・・俺は少し散歩してくるかな？』
キンジの問いに、少し考えてから答えた。
「そうか。学園島の中は多分安全だろうけど一応気をつけろよ。」
キンジはそう言い残して下に降りて行った。
『俺も行くか』
俺もキンジの後を追うように下に降りた。

『夜中の一人散歩なんて久しぶりだな・・・普段は基地の中で訓練ばっかりしてたし、外にいても基本的に誰か付いてきてたしな』

散歩に出たは良いが、行くところを思いつかなかったためとりあえず海岸沿いに歩くことにした。
潮風が気持ちいい。
『てか東京湾ってどんな魚居るんだろうな・・・潜って取りに行こうかな？』
などということを本気で考えていたら、いきなり自分の真上に殺気を感じたのでバックステップで下がる。
俺がバックステップをした直後、元々俺が居た場所に刀が突き刺さった。
上を見ると、電柱の上にトレンチコートみたいな服を着ていて、能などでよく見かけるような面を付けた男が立っていた。
若い感じがするが、それでいて熟練した武人のような重い威圧感を放っている。
『いきなり襲ってくるとは・・・何者だ？』
右手でベレッタを抜きながら、俺は仮面の男に声をかけた。
「フフフ、そう身構えるんじゃない。君とは戦うつもりはない。」
ハッキリと丁寧な中に、子供のような無邪気さを兼ね備えたような声で男は返してくる。
『何者だと聞いている。答えろ』
俺はベレッタを仮面の男に向けた。
「戦うつもりはないと言っただろう？それとも君は僕との死合いを望むのかな？」
気がつくと仮面の男は俺の目の前に立っていて、ベレッタを持つ右手を掴んで動けなくさせられていた。
速い・・・！！ヒステリアモードじゃなかったのを差し引いても、速い。
動きが待ったく見えなかった。
仕方なく俺は空いている左手を上げて降参の意を示す。
仮面の男は俺が降参したのを確認ーー仮面で隠れてるので良く見えないがーーしてから手を離した。

「ではまず私が名乗ろうか。私は鎌(れん)。君に渡すものがあって来た。」
鎌と名乗る男は、背中に背負っていた細長い袋に入った何かを俺に差し出してきた。
『これは・・・？』
「星伽・毒島から預かりし神器が一つ。神殺し、受け取るがいい」
毒島のところで若干ビクッと反応しつつも、言われるままに細長い袋を受け取ると、ずっしりとした重みが伝わってくる。
『・・・刀か』
袋の中身を取り出すと、平均的なものよりも若干長めの日本刀が入っていた。
「先に言っておくが、その刀は普通の刀ではない。その名の通り、神を斬る為に作られた刀だ。
そして、君はこの刀を用いてあるものを守らなくてはいけない。これはもう、逃れられない運命だ」
『何でそんな代物を俺に渡すんだ？』
どれだけ考えても、何故俺なのかが分からない。
だが、男から帰って来た答えは予想以上の物だった。
「君が森羅蒼天流の後継者だからさ。それが一番の理由だ。」
森羅蒼天流とは、昔から毒島家につたわる秘剣で、その技は全て必殺の剣になり得る程の剣術である。
俺は、森羅蒼天流を母から直接受け継いでいる。
それを知っているのは毒島と深い関わりを持つ遠山家の一部の物か、こちらも同様深い関わりを持つ星伽の人間の可能性が高い。
それ程の機密情報を、こいつは知っている。
それどころか、俺に関する情報はほとんど筒抜けと考えても良いだろう。
「納得がいってないみたいだね。まあ当然か。その刀の事は、星伽の人間から聞けばいい。
ということで、僕は帰らせてもらうよ。君とはまた遠くない未来に会う、そんな気がする。

その時に、また会おう。」
そう言って男は姿を一瞬で消した。
さっきは心地よく感じた潮風は、今となっては冷たく吹き付ける、
不愉快な風になっていた。

第3話～仮面の男と神殺し～（後書き）

後半の文章が自分でも良くわかんなくなってしまいましたｗｗ
以後、気をつけます↑

第４話～幼馴染と凸凹トリオ結成～（前書き）

前回の話、無理やり感が凄かったですね（自分で言うな）
ただ、早めに仮面の男を出しておきたかったもので・・・

第４話～幼馴染と凸凹トリオ結成～

鎌(れん)と名乗っていた男が消えたあと、神殺しを背中に背負い俺は帰路についていた。
あまり気分が良くないので、今日はもう寝てしまおう。
そう考えながら歩いていたら、前方から足音が聞こえた。
カン・・・カカン・・・
何この音・・・下駄？
真っ暗で姿は確認できないが、これは恐らくアイツだな。
『白雪』
暗闇の中から姿を現した巫女姿の少女に、そう呼びかけた。
「え？・・・もしかしてキン君？」
透き通るような綺麗な雪肌、綺麗な長い黒髪、整った顔立ち。
絵に描いたような大和撫子のこの少女は、星伽白雪(ほとぎしらゆき)。
代々続く星伽神社の巫女で、俺とキンジの幼馴染だ。
昔日本に来た時、俺は基本的に白雪の実家である星伽神社にお世話ー基本男子禁制なのだが、遠山と毒島の家の者だけは例外で入れる。さらに、俺の両親は父が遠山で母が毒島の家の人間のため、俺は星伽と特別縁が深いーになっていた。
そのときに良く遊んでいた子供の一人が白雪だ。
『久しぶりだな、白雪。確か最後に会ったのは４年くらい前だったよな。』
「いつ日本に帰って来たのキン君？　あと今着てるそれって、武偵高の制服？」
ちなみに白雪はキンジを「キンちゃん」、俺を「キン君」という呼び方で呼ぶ。
ややこしいったらありゃしない。
『今日の朝こっちに着いてね、今日から東京武偵高に転入したんだ』
俺がそう言うと白雪は信じられないといった顔をしたあと、うれし

そうに俺の手を握ってぴょんぴょん跳ねながら
「ホントに！？キン君がうちの学校に！？わーい♪」
と大声で喜んでいる。
近くに寮無くて良かったな。明らか近所迷惑だぞこれ。
『高校生になって大人になったかと思ったけど白雪はまだ子供だな』
そう言い白雪の頭にポンと手を置く。
「キンちゃんと同じこと言ってる。」
白雪は若干頬を赤らめ、顔を少し逸らしながら答える。
風邪でも引いてるのかな？
星伽に健康管理を徹底されている白雪が風邪なんて珍しいな。
『あ、そういえば白雪』
星伽で思い出した。これのことを。
「なに？キン君」
笑顔で白雪が聞き返してくる。
『白雪、この刀を知ってるか？』
そう言い、俺は神殺しを出して白雪に見せた。
すると白雪は表情を一変させ、まるで国宝でも見るような眼で神殺しをじっくり見回す。
「・・これ、何でキン君が持ってるの・・・？これは本来しかるべき場所に保管されているはず・・・」
驚愕した顔の白雪に、俺はさっきの男との間にあった出来事を白雪に説明した。
『そういうわけで白雪、何かこの刀について知ってるか？』
「ゴメンねキン君。私はこの刀のことはあまり知らないの。
だけど少しだけなら知ってる。この刀は星伽に代々伝わる秘宝の一つで、詳しくは言えないんだけど特別な金属でできていて、使用者を選ぶの。刀が。」
『刀が使用者を選ぶ？なんだそれ？』
俺は思った疑問をそのまま口にした。
「ゴメンね、そこまでは分かんないんだ・・・」

白雪は顔を俯かせる。
『白雪は悪くないよ。それほど機密扱いな代物なんだろう？』
コクッ、と白雪はうなずく。
しかし尚更分かんなくなったぞ。
『じゃあもし何か分かったら教えてくれ。』
白雪を部屋に送り、そう告げて俺は今度こそ部屋に帰り、寝た。
ー余談だが、アリアが仕掛けた対人地雷等のせいでベッドがある寝室の中に入れず、別室で寝た。

翌日の５時間目、俺は強襲科で最低限のノルマをこなし、一人で射撃訓練をしていた。
ガキの頃から銃を触っていたから、射撃は俺の十八番だ。
単純に射撃だけなら、ヒステリアモードを使わずともＳランクに近い腕を持っている。
速攻で狙いを定め、引き金を引く。
ズガガガガガン！！
ベレッタから発射された弾は、全てターゲットの中央付近に当たる。
「凄いね、毒島君。全弾」
マガジンを交換していると、後ろから誰かが話しかけてきた。
『君は・・・確か同じクラスの不知火君だったね。何か用かい？』
話しかけてきたのは、同じＡ組で同じ強襲科の不知火亮だった。
イケメンで礼儀正しく、性格も真面目で武偵高では珍しい人格者で、キンジ曰く「モテる」らしい。
ランクはＡで、ナイフ・格闘・射撃の全てで安定したスキルを持っている、とキンジが言っていた。
「不知火でいいよ。　実は、毒島君がアメリカ陸軍のデルタフォースの隊員だって話を聞いてね、少しＣＱＣで手合わせして貰えるかい？」
噂に聞いた通り礼儀正しいな。
こいつとは上手くやっていけそうだ。

『いいぜ。じゃあやろうか。』
俺たちは軽装のA装備に着替えて、体育館みたいな訓練施設に移動した。
噂の（？）転入生が格闘での模擬戦をやると聞いて、気づけばそれなりにギャラリーが出来ていた。
『さあ、始めよう。先手は譲るよ。』
そう言い、柔術の構えをとる。
「ん？軍隊格闘じゃないのかい？」
『それでも良いんだけど俺は柔術が得意なんだ。』
「そう。じゃあお言葉に甘えて僕から行かせてもらうよ！」
不知火は、接近して左足で足払いをしてきた。
『なかなか鋭いが、甘い！！』
俺は不知火の足払いに対し、右足を絡めて不知火の動きを制限させる。
「くっ！！」
不知火は投げ技をしようとしたのか、苦し紛れに俺の右手を掴んできた。
『ぬん！！』
掴まれた右手を利用して後ろに引き、不知火が前かがみになったところで絡ませた足も引いて転ばせ、手際良く腕ひしぎ十字固めをかける。
ギャラリーからは、「おおー！」という歓声が上がった。
俺の脚にタップしてきたたので締めをやめて、不知火が立ち上がるのを手伝う。
「流石だね、手も足も出なかったよ」
苦笑いしながら不知火が言う。
『一撃目の足払い、あれが駄目だった。柔道の足払いのようにやるとさっきみたいになるから、こうするんだ』
一気に身をかがめ、右足を伸ばしたまま回転して不知火の足を払う。
体制を崩して倒れたが、そこは流石Aランクの不知火、きちんと受

け身をとっている。
『ちなみに今のは相手が武器を持っているときに有効な技だ。いきなり低い攻撃がくるから、よほどの使い手でない限り跳んでかわすしかなくなるんだ。』
不知火は立ち上がりながら成程、と相槌を打ってくる。
『だが、不知火は俺が足を絡ませたときに転ばずに、更に反撃してきた。ホントはあの時に転ばすつもりだったんだけどね。だから、気を落とすことは何もないからね。』
授業時間が過ぎていたので、じゃあね、と言い残して俺は強襲科の施設を後にー出来なかった。
さっきの模擬戦を見ていたギャラリー達が、こぞって挑戦してきたのである。
結局、何故か暴徒と化したギャラリー全員を同志討ちをさせたりして全員倒し、部屋に帰る頃には日が沈みかけていた。

強襲科での乱闘騒ぎの翌日、しばらく部屋から出ないとキンジとアリアに告げ、俺はやっと届いた荷物を自室に運んで中を整理していた。
届いた段ボールは、大小合わせて６つ。
それぞれに「武器？」「武器？」「機材？」「機材？」「機材？」「衣類」と書かれている。
俺はまず、普通サイズの「武器？」の段ボールを開けた。
中には、アメリカで愛用していた銃器と付属品、予備パーツに改造用パーツなどがびっしりと詰められていた。
その中から俺は２丁の大型拳銃、Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　ＳＯＣＯＭ（Ｍｋ２３）を取り出した。
『やっぱりＳＯＣＯＭは良いねぇ♪』
俺が手にしてる２丁のＳＯＣＯＭ、実はこれ、俺が一から組み立てて色々とアレンジーー改造とも言うーーを加えた俺専用の拳銃である。

施した改造の例を上げると、薬莢の排出を速くして連射速度を上げたり、マガジンを外してから銃の横に取り付けたスイッチを切り替えると内部の機構が変化して５０口径の弾を撃てるようになる改造ーーこれはかなり金がかかっていて、多用すると壊れやすくなるーもある。
中の者を銃器専用のケースに入れ替えて、武器？の箱に手をかけた。
中には様々な刀剣が入っていたが、中でも異質なのは、三節棍みたいに柄をいくつにも折りたためるようになっていて、先端は薙刀のような形状で青龍の装飾が施されている武器。
三国志で有名なかの軍神『関羽』が使っていたとされる、青龍円月刀だ。
武器としては重くて使いこなすのが難しいが、上手く扱えばかなり強力な武器となる。
俺はこの武器を折りたたんでいつも背中に隠している。
青龍円月刀を折りたたんで背中に隠してから俺はでかい段ボールに入った機材？～？を一気に開けた。
機材とは、捜査などに使うコンピューター一式と、それを映す巨大ディスプレイに周辺機器である。
俺の特技の中に、ハッキングがある。
自作したソフトをいくつも用いれば、ペンタゴンにも潜りこめるー実際は軍関係で行ったときにシステムを把握したからーーほどである。
機材を全てセットすると、部屋が物凄く窮屈になった。
最後に衣類の箱を開けると、良く着る私服や軍服、潜入時に着る特殊スーツなどが入っていたが、一番下に衣類に交じって小さい箱が入っていた。
小さい箱を開けると、それは武偵弾がいくつも入った詰め合わせセットみたいなものだった。
武偵弾。それは一発一発が多様な特殊機能を秘めた強化弾。銃弾職人にしか作れず、希少で高価なために超一流の武偵にしか流通しな

い必殺兵器である。
服をクローゼットにしまい、武偵弾はさっき武器を入れたケースに入れた。
『さーて、機材が届いたわけだし、今後の対策のためにアリアの事でも調べてみるか』
ＰＣを起動させ、全て英語で書かれているサイトでアリアの情報を見つけ、読み上げる。
『神埼・Ｈ・アリア。１４歳からロンドン武偵局の武偵としてヨーロッパ各地で活躍したＳランク武偵。
まあそうだろうな。
武器は２丁のガバメントに２本の小太刀、４つの武器を使いこなすことから二つ名は「双剣双銃（カドラ）のアリア」。ロンドン武偵局にいた時の実績が、９９回連続で犯罪者をたった一度の強襲で逮捕。検挙率は１００％。
・・・俺はこんな奴に俺は一度襲われたのかよ。
祖母がイギリス王家からＤｅｍの称号を授与されていて、貴族である。
だからあんなに世間知らずなんだな。』

金助がサイトのめぼしい情報をメモしながらツッコんでいるその頃、キンジはアリアに強襲科に戻るようにアプローチを受けていた。
「今はムリだ。俺にはお前が言ってるような実力はない」
「今は、ってことは何か条件があるの？協力するから言いなさいよ」
「協力って・・・！！」
キンジはアリアが知らない間に放った爆弾発言に顔を赤らめる。
実力を出させるために協力する、と言ってたが、それはキンジを性的に興奮させるということと同義であった。
「教えなさいよ！なんでもするから・・・！教えて・・・教えなさいよキンジ・・・・！」
良く考えてみれば、しばらく部屋から出てこないと言っていた金助

を除けばこの部屋にはアリアとキンジの二人だけ。
そのシチュエーションとアリアの発言が、キンジをヒステリアモードにしかけていた。
あんなモードになりたくない！！
その思いがキンジを支配し、目の前にいたアリアをソファに突き飛ばし、顔を逸らして言った。
「・・・1回だけだぞ。　戻ってやるよ・・・強襲科に。ただし組むのは1回だけだ。
戻ってから一番最初に起きた事件を一つだけ、お前と一緒に解決してやる。それが条件だ」
そこでキンジは言葉を一度区切った。
「だから、転科じゃない。自由履修として強襲科の授業を受ける。
それでいいだろ？」
キンジの考えはこうだった。
自分の手駒を猛烈に欲しがっているアリアに、ヒステリアモードでない平凡な自分を見せつけて失望させる。
それに対しアリアは
「・・・分かったわ。じゃあこの部屋から出て行ってあげる。あたしにも時間は無いし、その一件であんた達の実力を確かめるわ。」
しぶしぶ、といった形でアリアは承諾した。
「どんなに小さな事件でも一件だからな」
あとからとやかく言われないために、キンジは念を押す。
「OKよ。その代り、どんな大きな事件でも一件よ。」
手抜きはしないこと、そうアリアが付け加える。
「分かった。絶対に手抜きはしない。全力でやってやるよ。」
通常モードの俺の全力、でな。
キンジは心の中で付け加えた。
ちなみに当然パーティーの中には金助も含まれている、ということを金助は後になって知ることとなった。

『勝手すぎる・・・・』

かくして、アリア・キンジ・俺の一度きりのパーティーが結成された。

第４話～幼馴染と凸凹トリオ結成～（後書き）

これで金助君にきちんとした武器を使わせてあげられますね。

実際はもっと早く出す予定だったんですが、武器の設定を考えるのに時間がかかってしまいましたｗｗ

ということで次回、凸凹トリオが事件に挑みます！

第5話～アリアが居ない夜とバスジャック～（前書き）

今回は新キャラクターが登場です！
だけど出番は少ないです↑

第5話～アリアが居ない夜とバスジャック～

知らぬ間にアリアとパーティーを組むことが決まった次の日、俺は鎌(れん)から受け取った神殺しを試すためにアリアと対峙していた。

「やあ！！」

アリアは2本の小太刀を構え、物凄い速度で接近して小太刀を交差させるように斬りかかってくる。

バックステップでかわし、右足で踏み込んで片手で突きを繰り出す。

アリアは片方の小太刀の上を滑らすようにして流す。

直ぐに神殺しを戻し、八相で構える。

アリアは接近しようと一歩踏み込もうとするが、先にこちらから接近して牽制する。

結果、アリアは接近できずに自分から距離を置く。

――アリアと俺では身体的にリーチがかなり違い、更に武器もこちらの方が長いのでアリアは俺の懐に入りにくくなっている。

それでも本来、SランクのアリアとAランクの俺の実力差はそれなりにあるので、これくらいのハンデがあろうとアリアが攻めあぐねることはない。

では何故アリアが攻めあぐねているのか？

答えは単純、周りにギャラリーが大勢居てアリアの身体能力をフルに使った素早い動きが出来ないのだ。

ちなみにこのギャラリー、俺が情報を流して意図的に集めた。

常に自分の有利な状況を作れ。というのが父の教えに従っただけで、断じてズルなどではない。

断じて卑怯ではない！！俺は情報を流しただけで直接呼んではーーそれを屁理屈というーーいない！！

膠着状態が1分くらい経った時、アリアが我慢できなくなったのか、正面から突っ込んできた。

『功を急いたなアリア。俺の勝ちだ！』

神殺しを振り上げ、アリアに斬りかかろうとした。
神殺しがアリアに届くその直前、突然強襲科の入口が開いた。
その場にいた人間全員が入口を振り返る。
唯一人を除いて。
「敵の前でよそ見しない！！」
アリアが小太刀の峰で、思いっきり俺の側頭部を殴った。
『頭は・・・無いだろ頭は・・・』
その言葉を最後に、俺の意識は途切れた。

『・・・ん？どこだここ』
目を覚ますと、真っ白な天井。
薬品の匂いがすることを考えると、ここは救護科（アンビュラス）の救護室のようだ。
アリアに殴られて気絶したあと、誰かに運ばれてきたらしい。
頭は・・・よし、痛みはない。
頭に痛みが無いことを確認し、ベッドから起き上がった。
それと同時に救護室の扉が開いた。
中に入って来たのは、同級生で尋問科（ダギュラ）の九澄鏡花（くずみきょうか）だった。
俺が転入してから、色々と面倒を見てくれている。
ちなみにかなりの美少女だ。
だが綺麗なバラには棘があるという言葉の通り、いざ本業である尋問をすると性格が一気に変わって凶暴になる、という噂がある。
「あ、毒島君気がついたの？」
とことことという擬音が聞こえてきそうな歩き方で歩み寄ってくる。
『さっきね。ところで鏡花がここまで運んでくれたのか？』
「うん。そうだよ」
『そうか、それはありがとう。でも重かっただろ？』
俺は身長が高く、自分で言うのもなんだがかなり鍛えてるから体重が８０ｋｇ近くあるのだ。
「不知火君が手伝ってくれたから平気だったよ」
鏡花が僅かに頬を赤らめて言う。

『不知火が？　あとで礼を言わないとな』
ベッドから降りて、横に立てかけてあった神殺しを腰に差す。
すると鏡花が心配そうな顔をして
「頭の怪我は大丈夫？私、見てたけど凄い勢いで殴られてたよ？」
と俺に近づいて言ってくる。
身長差があるので自然と上目使いになっている。
これがキンジだったら軽くヒスってーーヒステリアモードになる＝ヒスる　よりーーたかもな。
俺の場合は、何故かは分からないが、異性に興味が殆どないーー医者には恋愛てきな感情が欠落してると言われたーーため通常の性的興奮でヒステリアモードになりにくいのだ。
一応なれるのだが、よっぽどの事が無いとなれないのだ。
その代りに俺だけに現れた別なヒステリアモードのスイッチがあるのだが、それは次の機会で。
『大丈夫だ。　もう一度言うけど、運んでくれてありがとう。じゃあ俺はこれで。』
そう言い残して部屋に戻った。
密かにまた鏡花が顔を赤くしているのには気がつかずに。

『ただいまー』
部屋に帰ると、キンジがソファに座って一人でテレビを見ていた。
「おかえり金助。アリアに殴られて気絶したって聞いたが大丈夫か？」
『大丈夫だ。　ところで俺を殴った女王様は？』
アリアが居ないことを不審に思い、確認する。
「アリアは自分の部屋に帰ったよ。言わなかったか？」
『そういえば昨日言ってたな。・・・これでやっとゆっくり話せるな。』
「そうだな。　じゃあまずはそっちの話を聞かせてくれよ。少佐になったんだろ？」

『ああ。何回も潜入任務をこなしてたら、いつの間にか少佐になってたよ。この年でたくさん部下が出来て大変だよ』
そう言いながらキンジの横に腰をかける。
「金正叔父さんは元気か？叔父さんとは去年会ったけどそれ以来何の情報も無かったからな。」
去年といえば、金一さんの葬式か・・・
俺は任務で行けなかったからな。
『父上は元気すぎるんじゃないか、ってくらい元気だよ。今も多分基地で隊員をしごいてるだろうね。
俺が話すばかりじゃなくて、キンジも話せよ。』
軽くウインクし、キンジに話すよう促す。
「俺は・・・これと言って報告することがないんだよなぁ・・・・」
『ハハッ、何だよそれ。　じゃあ去年強襲科に居た時にやった任務（クエスト）の話でもしてくれよ。』
「そうだな、じゃあ去年の夏にやったあの任務の話にするか。
あれは確か夏休み直前で、不知火達と一緒にやったんだけどさーー」
俺たちはその夜、時間を忘れて遅くまで語り合った。

次の日の朝、俺はアメリカの父に現状を報告していたため、7時58分のバスに乗ることが出来なかった。
キンジは結構先に行かせたので、そのバスに乗っているはずだ。
徒歩じゃ確実に間に合わないため、男子寮の駐輪場にシートをかぶせて隠しておいたバイクにまたがる。
もしもの為に、ヘルメットは二つ備え付けてある。
そのうちの一つをかぶり、俺は男子寮から出た。
すると、雨の中キンジがバス停の前で立ち尽くしていた。
キンジの前でバイクを止める。
「金助か。なんでバイクなんだよ・・・」
『乗り遅れたのか？乗ってけよ。』
キンジに呼びのヘルメットを渡し、キンジが乗るスペースを空けた。

キンジが乗り込み、俺にしっかり掴まったのを確認してからバイクを走らせた。
雨で滑りやすくなった道を走り、専門校区の前にさしかかったところでキンジの携帯が鳴った。
「アリアか？　今は強襲科の前だが・・・え？C装備に着替えろってなんでだよ。授業は5時間目からじゃ・・・」
アリア相手に話していたキンジが、突然口を止めた。
俺はバイクを止める。
『どうしたキンジ？何かあったのか？』
電話を切って携帯を閉じたキンジに問いかける。
すると、キンジから予想外の言葉が発せられた。
「事件が起きたらしい・・・C装備に着替えて女子寮の屋上に来いって」
事件。キンジはそう言った。
最初に起きた事件を、大小問わず一緒に解決する。
それがキンジがアリアに組むことを決めたときに提示した条件だ。
電話越しに軽く聞こえたアリアの怒鳴り声から察するに、大事件だと思われる。
急いでC装備に着替えた俺達は、急いで女子寮の屋上に向かった。

屋上のドアを開くと、無線機に何かを怒鳴っているアリアが居た。
それともう一人。
「レキ」
キンジがドアのすぐ近くに体育座りをしていた少女に声をかけた。
彼女の名はレキ。
狙撃科（スナイプ）の生徒で、入試の時からずっとSランクを維持し続けている狙撃の天才だ。
こんなやつを呼ぶってことは、やはり大きな事件であることは間違いなさそうだ。
「時間切れね・・・もう一人くらいSランクが欲しかったけど、皆

他の事件で出払ってるみたい」
通信を終えたアリアが俺たちに近づいてくる。
「この４人パーティーで追跡するわよ」
『追跡って何をだ？　何が起きたんだ？アリア』
俺は状況説明（ブリーフィング）をアリアに求めた。
アリアから返ってきた言葉に、俺とキンジは驚愕した。
「武偵高行きの７時５８分に第３男子寮前に停車したバス。そのバスに爆弾が仕掛けられたわ」
・・・爆弾？
『それって・・・まさか・・・』
「そうよ」
アリアは言葉を区切り、溜めてからこう言った。
「バスジャックよ！」

第5話～アリアが居ない夜とバスジャック～（後書き）

次回、３人がバスジャック事件で奮闘します！
お見逃しなく！

第6話～バスジャックと消えない傷～

アリアはバスジャックの犯人を、最近暗躍している「武偵殺し」なるやつの仕業だと断言した。
『武偵殺しの事を少し聞かせてくれないか？』
「いいわ。　武偵殺しは武偵が乗った乗り物に減速すると爆発する爆弾を仕掛けて、遠隔操作でコントロールするの。
最初の武偵はバイクを狙われたわ。次がカージャックでその次がキンジのチャリジャックで今回がバス。
やつの遠隔操作のときに使う電波にパターンがあって、キンジの時も、今回もその電波をキャッチしたのよ。」
「でも武偵殺しは逮捕されたはずじゃ・・・？」
「それは真犯人じゃないわ・・・」
「何だって・・・？何の話をしてるんだ――」
「背景を説明してる暇はないわ！それにあんたには知る必要もない。
　このパーティーのリーダーはあたしよ！」
アリアがそう熱弁すると、急に俺たちは何かの陰に覆われた。
上を見るとそこにはヘリが降下してきていた。
こんなものまで用意してるとはな・・・
「・・・クソッ！やりゃいいんだろ！」
やけくそ気味でキンジが叫ぶ。
「キンジ、金助。これが約束の最初の事件になるのね」
「大事件だな・・・俺はとことんツイてないよ」
『え？大事件なのこれ？アメリカでは日常茶飯事だったけど』
「約束は守りなさい？キンジ。あんたが実力を見せてくれるのを楽しみにしてるから。
もちろん金助もね」
「言っておくが、俺にはお前が思っているような力はないからな」
キンジはそう言ってヘリに乗り込んだ。

『対テロ部隊の俺が言うのもなんだけどそんなに期待はしないでね』
俺もキンジに続いてヘリに乗り込んだ。
「万一ピンチになるようだったらあたしが守ってあげるわ。安心なさい」
「・・・・・・」
アリアとレキも乗り込み、ヘリは台場方面に向かって飛び立った。

≪男子寮前を出た後バスは、どの停留所にも止まらず暴走。その後車内からバスジャックされたと緊急連絡が入りました。
現在バスは青海南橋を渡って台場に侵入しています≫
無線装置からオペレーターの説明が入る。
アリアの話によると、警視庁と東京武偵局の両方は動いてはいるが、先に電波を掴んで通報よりも先に準備を始めた俺たちが一番乗りのようだ。
「見えました」
レキの声に、俺達3人はそろって窓の外を見た。
だが、距離がありすぎて車は小さすぎてよく見えない。
「何も見えないぞ、レキ」
「ホテル日航の前を右折しているバスです。窓に武偵高の生徒が見えています」
『良く見えるな・・・・レキ、視力いくつ？』
「左右ともに6・0です」
軽いノリで超人的な数値を言ったレキに対し、俺らは顔を見合わせる。
ヘリがレキの言った辺りに高度を下げると、本当にバスがあった。
しかし速いぞ。かなり速度が出ている。
「空中からバスに跳び移るわよ。あたしはバスの外側をチェックするからキンジは内側の状況を確認。連絡して。レキはヘリで追跡しながら待機。
金助は――」

『バスの上で前のセグウェイのようなやつが来ないか監視、だろ？』
アリアが言おうとした言葉を先に言い、天井のランドセルみたいな強襲用パラシュートを装着する。
「流石デルタフォースの隊員ね」
アリアもそう言いながらパラシュートを装着する。
唯一不満そうな顔のキンジは渋々、といった感じで天井からパラシュートを外していた。
「準備はいいわね？行くわよ！」
俺たちは同時にヘリから飛び出し、パラシュートで自由落下に近い速度でバスに着地する。
キンジは滑って落ちそうになるが、アリアに支えられている。
アリアはワイヤーを屋上にさして宙吊りの体制でバスの下を確認し、キンジは中から窓を開けてもらって内側の確認に入った。
かくいう俺は、強襲科に置いておいたアサルトライフル、Ｍ４Ａ１カービンを構えて周囲を警戒していた。
「キンジ！そっちの状況は！？」
アリアの声だ。
「アリアの言っていた通り、このバスは遠隔操作されている。そっちはどうだ？」
「・・・爆弾らしいものがあるわ。カンジスキーβ型のＣ４、武偵殺しの十八番よ。見えるだけでも炸薬の容量は、３５００立方センチはあるわ！」
『なんだと！？』
アリアの声に、つい叫んでしまう。
いくらなんでも過剰過ぎる炸薬量だ。
バスどころか電車だって楽勝で吹き飛ばせる。
とその時、後ろから物凄い速度で接近してくるオープンカーが見えた。
その操縦席には、人の代わりにＵＺＩが乗っていた。
『アリア！後ろだ！！』

「潜りこんで解体を試み――あっ！！」
俺の叫びもむなしく、オープンカーはバスの後方ーーつまりアリアに激突した。
『チッ！！』
俺は舌打ちしつつ、オープンカーのＵＺＩに狙いを付けるが、今にも発砲してきそうな状況だったため屋上に伏せた。
中ではそれに気づいたキンジが生徒たちに声をかけて伏せさせていた。
それと同時、ＵＺＩは側面からバスに向かってまんべんなく発砲した。
銃撃が止むと同時に起き上がり、すぐさまオープンカーに向かって跳んだ。
発砲した直後だったために銃座はこちらに反応するのが遅れ、その間に両脇のホルスターから抜いたＭｋ２３２丁で銃座を破壊し、オープンカーに乗り込んだ。
『アリア！！大丈夫か！！』
バスの後ろに車を回し、アリアの安否を確かめる。
「ヘルメットをかち割られたけどなんとか無事よ・・・それよりその車・・・」
アリアはワイヤーで屋上に這い上がろうとしていた。
『さっきのっとった。だがまだ安心できない。早いとこ爆弾を解除しないとな』
バスがレインボーブリッジに入る。
車が無いところをみると、警視庁あたりが手を回したんだろう。
アリアが這い上がったと同時に、ヘルメットを付けていないキンジが側面の窓から出てきた。
「キンジ！ヘルメットはどうしたの！？」
「運転手が負傷して、今代わりに武藤にメットを貸して運転させてる」
「危ないわ！どうして無防備に出てきたの！なんでそんな初歩的な

判断もできないのよ！直ぐに車内に隠れ――後ろっ！伏せなさいよ！何やってんのバカっ！」
キンジに散々罵声を浴びせ、突然顔色を変えてキンジに向かって突っ込んで行った。
『まさかもう1台来たのか！！』
急いで車をバスの前に移動させる。
すると案の定、ＵＺＩを搭載したオープンカーがいて、キンジに狙いを付けていた。
『クソッ！！』
直ぐにＭｋ２３を抜いて狙いを付けるが、時すでに遅し。
ＵＺＩはキンジに向かって弾を２発発射した。
『キンジ！！』
慌ててキンジの方を見ると、アリアがキンジを庇っておでこに掠るように被弾していた。
アリアも負けじと被弾しながらガバメントでＵＺＩに発砲し、銃座から落としていた。
アリアはそのままバスの側面から落ちそうになったが、キンジが伸びていたワイヤーを掴んで引っ張り上げた。
「アリアっ！！」
キンジがアリアを抱きかかえるなか、銃座を破壊されたオープンカーがバスの横に回り込もうとした。
おそらく体当たりをする気だろう。
『させるかっ！！』
Ｍｋ２３でオープンカーのタイヤに弾を当て、パンクしたオープンカーは回転しながらガードレールにぶつかり、爆発、炎上した。
そしてその直後ーーパァン！
と銃声が聞こえてきた。
横を見ると、さっきのヘリがレインボーブリッジの横を並走している。
そしてその開かれたハッチからは、ソ連が開発した狙撃銃のドラグ

ノフを構えたレキがいた。
≪私は一発の銃弾。銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない≫
インカムからレキの詩のようなことをつぶやく声が聞こえる。
≪――ただ目標に向かって真っすぐ飛ぶだけ≫
レキがそのセリフを言い終わると同時に、ドラグノフが、パァンパンパン！と3回銃口を光らせた。
レキが狙撃したのはーーバスの下の爆弾。
バスの下から、部品ごと爆弾が転がり落ちた。
≪ーー私は一発の銃弾ーー≫
再びそのセリフを言ったレキは、爆弾に向かって発砲。
弾が当たった爆弾はは跳ねるような動きでレインボーブリッジの下、すなわち海に落ちた。
数秒後、ドォン！！という爆発音と共に巨大な水柱が上がった。
バスが停車し、俺も横に車を止めてバスの屋上に上った。
そこには、額から血を流して動かないアリアとそれを抱きかかえるキンジが豪雨に打たれていた。

アリアは直ぐに武偵病院に搬送された。
額の傷は、運が良かったとしか言えない。
銃弾はただアリアの額を掠めただけであって、重症では無かった。
被弾したことによって脳震盪を起こしていたが、ＭＲＩも撮ったが、脳出血も無く外傷だけで済んだようだった。
翌日、キンジと共に報告書を教務科に提出し、ありったけのももまんを手に武偵病院に向かった。
アリアの病室は・・・予想通り、ＶＩＰの個室だな。
貴族だから当然だろう。
中に入ると、まず小さなロビーがあって、そこには「レキより」と書かれたカード付きの白百合（カサブランカ）が飾ってあった。
あの無口でロボット・レキとあだ名されているレキがあんなものを持ってくるとは、少し予想外だった。

パッチン・・・パッチン。
少し開いていたベッドルームからヘンな音が聞こえる。
俺とキンジは、不審に思って隙間から中の様子をうかがったところ、でかいベッドに座ったアリアが・・・・。
手鏡で自分の額を見ていた。
「・・・・」
集中しているのか、こちらに気づく様子はない。
被弾した額には、交差するように2本の傷跡を残して、チャームポイントと自慢していたーーキンジに聞いたーーおでこを台無しにしている。
医者に聞いたのだが・・・どうやってもあの傷は跡が残ってしまうらしい。
ーー一生消えない傷が。
パッチン・・・パッチン・・・
アリアはかなり沈んだ顔で、いつも使っていた髪留めを付けては外し、付けては外しを繰り返していた。
・・・かなり気にっていたんだな、あのおでこ。
「アリア・・・」
その光景に耐えられなくなった俺達は、今来たフリをしてドアにノックをした。
「あ、ちょ、ちょっと待ちなさい！」
急でびっくりしたのか、何やらがさごそと慌てた音がする。
「・・・いいわよ」
アリアの許可が出たので中に入ると、アリアは額に包帯を巻きなおしてガバメントの整備をしていた。
いらん早業だな・・・。
「・・・お見舞い？」
露骨に嫌そうな目で俺らを軽く睨んでくる。
「けが人扱いしないでよ。この程度の傷で入院なんて、医者は大げさよ」

「れっきとしたけが人だろ？その額の傷・・・・」
キンジはアリアの額を見つめ、言葉を詰まらせる。
「傷がどうしたっていうの？何ジロジロ見てんのよ」
「その傷、跡に残るらしいな・・・」
申し訳なさそうな顔でキンジが言う。
「だから何？別に気にしてないわよ？あんた達もきにしなくていい。はい整備終わり」
そう言ってガシャン、とガバをぶっきらぼうな態度でサイドテーブルに置くと、腕を組んだ。
「私は武偵憲章１条「仲間を信じ、仲間を助けよ」に従っただけよ」
「武偵憲章だなんて・・・そんなキレイ事をバカみたいに守るなよ」
「・・・・・あたしがバカだっていうの？キンジの分際で。でも、・・そうね。こんなバカを助けたあたしはバカだったのかもね」
そう言ってアリアはぷい、そっぽを向いてしまった。
・・・・気まずっ！
これ以上この空気に耐えられそうになかったので、アリアにももまんを渡して部屋を出た。

しばらく外で待っていると、やるせない顔のキンジが出てきた。
『・・・帰ろうか』
こういう時は慰めたりはせず、そっとしておいてやるのが一番なのだ。
そういう俺の気持ちを察したのか、キンジはギリギリ聞こえる声で
「ありがとう」
とつぶやいた。

部屋に帰ってから、キンジはずっと何かを考えていた。
かくいう俺は、武偵殺しのことで何かが引っかかったので自室のＰＣで警視庁のシステムにハッキングをしていた。
そこで俺は不自然な事件データを見つけた。

その事件データとは『１２月２４日　浦賀沖海難事故　死亡　遠山金一武偵（１９）』、金一さんが死んだあの事故だった。
良く調べると、この事故は明らかに何者かの隠蔽工作によって事故とされていることが分かった。
更に気になるのは武偵殺しによるバイクジャック、カージャックと、キンジのチャリジャックとの間の期間にこの事件が起きている、ということだ。
俺の頭に一つの結論が導き出される。
『金一さんの死は、ほぼ確実に武偵殺しに関係している・・・！！』
俺はいてもたってもいられず、すぐさま着替えて部屋を飛び出た。

アリア、キンジ、金助、そして武偵殺し。
それぞれの思いが交差する中、事件は佳境へと近づいていく・・・！

第6話～バスジャックと消えない傷～（後書き）

作者の私が言うのもなんですが、バスジャックの時に主人公いらなくね？

てことで次回はキンジ目線で物語が進行する予定です、

第7話～アリアの母～（前書き）

今回は短いです。

第7話～アリアの母～

結局、キンジはアリアと喧嘩別れをした、ということになってしまった。
アリアにしつこく付きまとわれていた頃のキンジが一番望んでいた結末。
なのに、何故かモヤモヤとしたものが心から無くならない。
何とも言えないイライラした感情を引きずったまま、週末を過ごしていた。
金助はアリアのお見舞いに行ったあの日の夜に「調べることがあるから少しの間家を空ける」と言って出掛けたまま、帰ってきていない。
アリアが退院する予定と聞いていた今日は、なるべくアリアの事を考えないように洗濯や掃除などの家事に没頭していた。
だが、それがいけなかった。
昼過ぎに、アリアを見かけてしまったのだ。
偶然クリーニング店に行って出た直後、隣の美容院から出てきたのだ。
そのあまりの変貌ぶりに、キンジはつい足を止めてしまった。
若干重い表情をしたアリアは、ツインテールはそのままで少し髪形を変えていた。
前髪を作っていたのだ。
事情を知らない人が見れば、単純に可愛いと思えたのだろうが、あれは聞くまでも無く額の傷を隠すためのものだろう。
そう思ったキンジの胸の奥にチクリとした痛みが走る。
キンジに気づかずに、アリアはモノレール駅の方へ歩き出した。
アリアの服装は、いつも見かける制服ではなく私服だった。
白地に薄いピンクの柄が入った清楚なワンピースを着たアリアは、ファッション誌から出てきたように今風で、非常に似合っていた。

今のアリアの写真を撮って雑誌の表紙にでもすれば、あの服は飛ぶように売れるだろう。
そうキンジに思わせるほどアリアの私服は可愛かった。
しかし、普段からアリアは身だしなみに気を使う方だったが、あそこまでおめかしをした姿は見たことが無かった。
「（デートでも行くのだろうか？）」
そう考えたキンジは、ついアリアを尾けてしまっていた。

モノレールに乗り、ＪＲで神田を経由して、新宿で降りた。
気づかれないようにある程度距離をとって歩いていたキンジには、すれ違う男どもがアリアをちらちら見ているのが分かった。
あれだけの美少女が、あんなにオシャレをしているのだから無理はないだろう。アリアを尾けて行くと、オフィスビルくらいしかないビル街の方向に出た。
そのまま尾行を続けていると、アリアは予想外の建物の前で足を止めた。
新宿警察署である。
「（オシャレした高校生が来る場所じゃないだろ）」
そんなことを考えて気を抜いていると
「・・・・下っ手クソな尾行。シッポがにょろにょろ見えてるわよ？」
アリアが振り返らず、しかし確実にキンジに向けて言った。
「なんだ、バレてたのかよ・・・。質問せず武偵なら自分で調べなさいって言ったのはお前だろ？
てか気づいてたならなんで言わなかったんだよ」
「迷ってたのよ。教えるべきなのかどうか。あんたも一応『武偵殺し』の被害者の一人だからｎ」
「？　何のことだ？」
「もう着いちゃったし、まあ良いわ。着いてきなさい」
そう言うアリアにはいつもの覇気がなかった。

警察署に入って行くアリアに、いくつも疑問を浮かべながら着いて行った。

アリアが入ったのは、留置人面会室だった。
少し待って、アクリルの板越しに二人の監理官に連れてこられた女性に、キンジは見覚えがあった。
アリアが普段使っているガバメントのグリップにはカメオが埋め込まれていて、それに彫られていた美人に良く似た女性だった。
柔らかな曲線を描く長い髪、オニキスのような瞳。どことなくアリアに似ていた。
「まあ・・・・アリア。この方、彼氏さん？」
「ちっ、違うわよママ！！」
キンジを見て少し驚いたような顔をしたこの女性が・・・アリアの母なのだろう。
かなり若いな・・・。
母親っていうより、年が離れた姉と言われた方がしっくりくる。
「じゃあお友達かしら？ただでさえ友達を作るのが苦手だったアリアが、ねぇ。ふふふ・・・」
「違うのよ。こいつは遠山キンジ。武偵高の生徒で、そういうのじゃないわ」
そこまで否定しなくても良いだろう、とツッコミたかったがここは黙っておこう。
「・・・キンジさん、初めまして。私はアリアの母で、神崎かなえと申します。娘がお世話になっているようですね」
「あ、いえ・・・」
こんなところに居るにもかかわらず、かなえさんはその場の空気を全て柔らかく包んでくれるような感じのする人だった。
実は、キンジはこういう人に少し弱いのだ。
柄になくどぎまぎして、滑舌が悪くなってしまう。
アリアはキンジをイラッとした目で睨んで、アクリル板のほうに身

を乗り出した。
「ママ、面会時間が3分しかないから手短に話すけど、このバカは『武偵殺し』の3人目の被害者なの。先週武偵高で自転車に爆弾をしかけられたの」
「・・・まぁ・・」
かなえさんは表情を硬くする。
「更にもう一件。一昨日はバスジャック事件が起きてる。ヤツの活動は、急激に活発になってきてるのよ。てことは、もうすぐシッポも出すはずだわ。
だからあたし、狙い通りまず『武偵殺し』を捕まえる。ヤツの件だけでも無実を証明すれば、ママの懲役８６４年が一気に７４２年まで減刑されるわ。
最高裁までの間に、他も絶対なんとかするから」
アリアの言葉に、キンジは目を丸くした。
「そして、ママをスケープゴートにしたイ・ウーの連中を、全員ここにぶちこんでやるわ！！」
どうやらアリアの母は、いくつもの罪を着せられているようだった。
そのままアリアとかなえさんの話は続いた。
かなえさんが管理官に連れて行かれるまで・・・
そして帰りの道で、母を想うあまりアリアが泣いたのはキンジだけが知るところとなった。

一方その頃金助は、ある人物に電話をかけていた。
『プルルルル・・・・もしもし、父上ですか？』

第7話～アリアの母～（後書き）

早く金助パートに戻したく、ある程度割愛させて貰いました。

次回、ついに武偵殺しとの最終決戦。

そして謎の人物も登場し・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1430y/

緋弾のアリア～神殺し伝説～

2011年11月9日01時01分発行